

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

「山岳総合センター高校登山研修会」参加報告

文：岡谷工業高校 山岳部顧問 丸山真明先生

5月9日(土)から10日(日)までの2日間、長野県山岳総合センターが開催する「長野県高等学校 登山研修会」に参加しました。生憎、生徒たちはPTA総会で授業のため顧問一人での参加となりました。以前からこの研修会への参加を多くの先生方から勧められながら、なかなかチャンスが無く、ずっと参加したいと思っていたのですが、山岳部の顧問を17年間やってきて初めての参加でした。(南信地区では、登山競技も地区大会を行っており大会日程と重なることが多かったのです。)かれこれ40年以上も続いていると言われる研修会だそうですが、高校時代山岳部でなかった私にとっては、とても新鮮かつ魅力的な研修会に感じられました。

針ノ木雪溪下部の大沢付近で、テントの設営の基礎から学び、歩行時のピッケルの持ちから滑落停止に至るまで、初歩的なことから教えて頂きました。翌日は、針ノ木雪溪上部へアイゼンを付けての歩行訓練を行いながら猛烈な暴風に見舞われ、ピッケルを使った対風姿勢を体験することもできました。さらに、ロープを使った安全確保の講習としてフィックスロープの張り方、スリングやカラビナを使ったビレイ方法、ロープだけを使った懸垂下降など盛りだくさんの講習内容でした。

これらの講習は、顧問班だけ生徒から独立した班で行って頂いたので集中して学ぶことができました。しかも、講師が松田大先生、大西浩先生であったこともより顧問の立場を熟知した指導内容でとてもありがたく思いました。

教員に成って8年目の30代前半で山岳部顧問となってから17年間、顧問の経験だけは重ねてきましたが、雪上でのテント泊やピッケルを使った歩行経験がほとんど無く、冬期の山行に生徒を連れて行くことに日々不安を感じていました。学生時代に山岳部員として活躍した顧問でなければ、知らないことは山ほどあるはずです。しかも、顧問になったからには生徒と一緒に山に登らなければなりません。顧問が自信のない山に生徒を連れて行くリスクを考えれば、自ずと登る山域も限定されてしまいます。

知識を増やしや技術を高めるためには、山岳会に所属したり〇〇講習会などに数万円も払って参加したりする方法もあるのですが、私たちには幸いにも経験豊かで技術を持ち合わせた先輩や同僚が居ます。その先輩方も顧問の指導に一肌脱ごうとしてくれる姿がよくわかりました。

もっと多くのことを学ぶ機会が欲しいと感じました。もっと安全への備えができれば、様々な山域へ生徒と一緒に出かけられると思いました。そして、もっともっと山の魅力を生徒に伝えられるとも思いました。

<追記> 登山専門部役員として

何度も、顧問の先生を対象にした講習会を呼びかけたことがあったそうですが、あまり人が集まらなかったそうです。(私自身も反省ですが…)今回、講師をして頂いた松田先生や大西先生からは、「顧問対象の講習会」への協力を快く引き受けて頂いています。

同じような講習を他で受講しようとしても恐らく、数万円の参加料を取られるでしょう。先にも書いたように、経験豊富な先輩方が、協力してくれようとしている今、しかも、ほとんどお金もかからない(?) 最高の環境にいることを無駄にはもったいないと思います。

是非、若い顧問に成り立ての先生方を中心に、ベテランの先生方も参加されてみてはいかがでしょうか。長野県の山岳部を盛り上げていくためにも必要なことだと思います。

編集子のひとごと



昨年、8月のインターハイから11月にかけて、全国の高校山岳部の先生方をお願いをしてアンケートを実施したことはかわらばんでもご紹介した。

結果については、鹿屋体育大学の山本先生、静岡大学の村越先生にご協力をいただき、分析をしてきた。

小生が分析した部分については、第1弾として3月に発行された国立登山研修所の紀要「登山研修」に掲載していただいですでに公表した。

過日(6月20~21日)、香川県で行われた登山医学会では山本先生が第2弾の発表をしてくださった。それらについては、おいおいご紹介したいが、信毎紙上でも上記のように紹介していただいた。今回の丸山先生の寄稿してくださった内容は、まさにこのことを如実に語っていると思う。僕自身の経験を振り返っても、同じ高校山岳部顧問の先生から学んだものは数知れない。長野県の実態を鑑みるに、40代半ばより若い山岳部顧問は、ほとんどいない。その意味で10年後に山岳部を背負ってくれるような顧問の育成は急務である。生徒は増えている現状の中、顧問の育成は喫緊の課題である。(大西 記)